日本介護福祉学会通信 No. 82

2024年4月発行
発行：日本介護福祉学会　The Japanese Association of Research on Care and Welfare
〒162-0801　東京都新宿区山吹町358-5　（株）国際文献社内

第32回日本介護福祉学会大会（予定）

大会テーマ　科学的介護を見据えた介護福祉学の到達点
～ 全人的介護と科学的介護の調和に向けて ～

大会日時　2024（令和6）年8月25日（日）　※前日24日（土）に大会公開講座を開催

大会会場　北星学園大学（札幌市厚別区大谷地西2－3－1）

参加費

	4/1～5/31	6/1～7/31	当日
学会員	6,000円	7,000円	10,000円
非学会員	9,000円	10,000円	12,000円
学生	2,000円	2,000円	3,000円

※賛助会員は「会員」参加費。学生の場合は会員・非会員に関わらず「学生」参加費
日程が北海道マラソンと重複しています。札幌圏の宿泊先がすでに高騰してきているので、お早めの確保をお願いいたします。

主催　第32回 日本介護福祉学会大会 実行委員会

共催　2024年度 日本介護福祉学会 北海道地区公開講座

後援（依頼中のもの・予定のものを含む）厚生労働省、北海道、札幌市、北海道社会福祉協議会、北海道福祉人材センター、北海道老人福祉施設協会、札幌市社会福祉協議会、北海道介護福祉士会、北海道社会福祉士会、北海道精神保健福祉士協会、北海道介護福祉士養成施設連絡協議会、介護福祉士養成大学連絡協議会、中央法規出版株式会社

プログラム

8月24日(土)

14:00～15:30　公開講座
　テーマ 「介護人材の確保と育成 ～量的確保と質保証のバランス～」

16:00～17:30　学会評議員会

18:00～20:00　懇親会

8月25日(日)

9:30～10:00　開会式と基調講演
　基調講演 「介護福祉学の構築と科学的介護」 畑亮輔(北星学園大学:大会長)

10:00～11:30　学会企画シンポジウム(学会30周年記念企画)
　テーマ 「介護福祉学の到達点と将来像」
　司会・シンポジスト　調整中(「介護福祉学の到達点と将来像」編集委員より選出)

11:30～12:30　学会総会

12:30～13:45　自由研究発表①(1会場5演題)

13:55～14:55　自由研究発表②(1会場4演題)

15:00～16:15　大会企画シンポジウム
　テーマ 「科学的介護が照らす全人的介護への道 ～科学的介護の具体的取り組みから～」

16:15～16:30　閉会式

大会長 兼 実行委員長
畑　亮輔(北星学園大学)

実行委員
八巻貴穂(北翔大学)
竹内美幸(北翔大学)
山道祐子(北翔大学)
竹田千春(北翔大学)、
池森康裕(北海道医療大学)
高橋由紀(北海道医療大学)
林美枝子(北海道医療大学)
平野啓介(北海道医療大学)
織田なおみ(日本医療大学)
酒井賢一(北海道介護福祉士会)

The 32th Annual Meeting

in HOKKAIDO

北星学園大学

The Japanese Association of Research on Care and Welfare

科学的介護を見据えた介護福祉学の到達点

～ 全人的介護と科学的介護の調和に向けて ～

第32回 日本介護福祉学会大会

※2019年度以来５年ぶりの現地開催です。皆様とお会いできることを楽しみしています

開催日時（予定）

2024年 8月25日（日）9:30～16:30

※8月24日(土)14:00～15:30に大会公開講座開催

会場（現地開催）

北星学園大学（大谷地駅※から徒歩５分）

（〒004-8631 札幌市厚別区大谷地西2-3-1）

※新千歳空港からバス(直通)40分、電車50分

主催

第32回 日本介護福祉学会大会実行委員会

大会長兼実行委員長

畑　亮輔（北星学園大学）

実行委員

八巻貴穂、竹内美幸、山道祐子、竹田千春（北翔大学）
池森康裕、高橋由紀（北海道医療大学）
林美枝子、平野啓介、織田なおみ（日本医療大学）
酒井賢一（北海道介護福祉士会）

日本介護福祉学会
The Japanese Association of Research on Care and Welfare

研究スタートアップ支援 公開ゼミを開催

研究活動支援委員会　堀江竜弥（仙台大学）・水谷なおみ（日本福祉大学）

2023年12月23日（土）13：00～16：00、オンライン（Zoom）にて研究活動スタートアップ支援　公開ゼミを開催しました。この企画は日本介護福祉士会との介護福祉研究に係る相互連携において研究活動を推進していく取り組みとして研究活動支援委員会が中心に運営し、第1回目として実施しました。

参加者は日本介護福祉学会の学会員、日本介護福祉士会の会員など約100名が参加しました。3つの実践・研究活動の報告を踏まえ、コーディネーターや参加者からの意見交換を通して、研究として今後どのように深化させていくのかをディスカッションするセッションと、事前に得られた研究に関する疑問に対しコーディネーターを中心に回答するセッションに分けて行いました。

報告①は『自職場での課題と向き合う』～認定介護福祉士養成研修を終えて向き合った自職場の課題～と題し、梶谷峻吾氏（認定介護福祉士）がハラスメントでの課題と対処に関する取り組みについて紹介頂き、報告②は「地域福祉活動（地域支え合い活動）にたいする認定介護福祉士としての関わり事例～草取り支援を通して地域への関わり方を考える～」と題し、水野公智氏（認定介護福祉士）が自治体での活動体験をもとにした取り組み実践と今後の研究の方向性について紹介頂きました。報告③は「排泄機器を使用した介護実践』に関する取り組み」と題し、水谷真弓氏（大阪人間科学大学）より実践前後の職員を対象とした認識の変化に関する実態調査を紹介頂きました。認定介護福祉士の2名から得られた報告は実践活動から疑問を感じ研究に取り組もうとする意識が高く、参加者もチャットで多くの質問やコメントを残して頂きました。

また、大学教員からの報告では、研究の視点や一連の流れが理解できるように丁寧に説明されておりました。研究における疑問では、研究の進め方、文献検索、調査方法、まとめ方など研究の基礎的部分についての疑問のほか、タイムマネジメントや協力体制などについての質問などバラエティに富んでおりました。2名のコーディネーターの経験をもとに可能な限り質問に回答しました。

研修のアンケートでも、多くの方より「参考になった」と評価を頂き、自由記載では「基本的な部分が理解できた」、「非常に内容の濃い研修会だった」、「研究に取り組もうと思った」、「今後も継続してこの企画を取り組んで欲しい」との意見も寄せられました。

研究活動支援の一環として今回、スタートアップ支援を公開ゼミ形式で企画しましたが、研究活動に多くの関心が寄せられていることも実感できる機会となりました。本委員会としても学会員の皆さまが研究活動をするにあたり、少しでも貢献できるよう活動して参りたいと思います。

連載企画 「私と介護」(6)

家族介護者の視点から伝えたいこと

武田　卓也
日本介護福祉学会理事
(学校法人薫英学園　大阪人間科学大学　教授)

愛媛県出身。大学を卒業後、23歳の時に母親がくも膜下出血に倒れ主介護者として長年介護を担ってきた。その後、介護福祉士を取得した。現在は介護福祉士の養成に携わりながら、自らの経験をもとに若年介護者への支援について研究を行っている。

○はじめに

「介護と私」の執筆依頼を頂きまして、何を書こうか、あれや、これやと自分の人生を遡り、紐解きながら、考え悩んだ末にたどり着いたのが、23歳から14年間ほど、くも膜下出血で倒れた母親への介護を担ってきた家族介護者としての経験から考えることである。なぜならば、この母親の介護経験が私の今につながり、私が介護に関心を持ち、介護福祉士を取得し、研究に足を踏み入れた原点だからである。ここでは原点回帰をしながら描くことにする。

○離島で育つ

私は愛媛県と広島県の県境にある瀬戸内海の小さな離島で生まれ育った。島内には幼稚園、小学校、中学校、高校などそろっているが、高校を卒業すると大半の人が島を出て、それぞれの進路に進むのが一般的である。島のコミュニティーは顔の見える関係で、地縁や血縁など絆も深く、私は地域に守られ、地域に育てられている感覚を持ちながら過ごした。自然環境も豊かで、面前には海、後ろには山がある。しかし、時と共に過疎化、少子高齢化が進み、地続きでない環境から医療、保健、福祉環境に課題が見られることは否めない。また、将来を考えると、島から一度出ると産業が乏しく、戻ることは難しいが、そこには親が生活している現実がある。必然的に将来の介護について考えなければならないことが、離島の抱える介護の課題でもあるように思える。

○家族介護者となる

私が高校1年生の時に突然、父親の死に直面した。父親は外国船の船乗りで、世界を行き来していた。ある日、救命ボートの清掃中に転落事故に遭い冷たい海の中で行方不明となった。その時、母親はどんな気持ちであったろうか。当時の母親の精神的ショックを考えると計り知れない。断片的な記憶しかないが、母親が私たち子どものことを考え、父親の死を社会

的に受け入れてもらうために奔走し、身体的、精神的な疲れを抱えソファーで横になっていた姿が目に浮かぶ。それから暫くは平穏な日常が続いたが1999年の秋、母親が49歳でくも膜下出血に倒れた。10時間以上に及ぶ手術の後、一命をとりとめたものの介護が必要な状態になった。私が23歳の時、弟が20歳の時である。ここから私は介護者であることを意識し介護を担い始めた。

〇家族介護者への支援を体験的に学ぶ

今でこそ、社会が看過してきた子どもや若者が担う介護に注目が集まり始めているが、当時は若くして介護者となった私のような存在は特殊ケースだったのだろう。その分、身近にいた様々な人や医療、保健、福祉の専門職などから温かく、見守られ、支えられ、専門職の専門的な支援を受けた。特に私の中で印象に残っているのが、医師から「あなたは若いから介護をしながらでも自分の人生を生きなさい」という内容の言葉を頂いたことである。この言葉は介護者として、余裕なく奮闘していた私の介護に対する偏った考えを和らげ、自分の未来を見直す契機となった。また、未来に導く出会いもあった。それは母親がリハビリ病院の4人部屋に入院していた時、少女が入院してきた。少女は時間を持て余していたのだろう。私に話しかけてきた。その少女は目を輝かせ、「高校を卒業したら介護福祉士を目指して専門学校に進学すること。介護福祉士の魅力」を私に語ってくれた。この少女の話に魅了されたことが、私が介護福祉士の取得を目指す契機となり、今の自分につながっている。

〇後進の育成に携わり大切にしていること

介護福祉士の取得を目指してから20年以上の時が経過し、今大学で介護福祉士の養成や研究に携わる機会を頂いている。後進の育成にかかわる中で、私が大切にしていることは、「人を理解することの難しさを理解しておくこと」である。人を理解することは難しい。だからこそ介護が必要な人を支援するには、その人のことを理解するために真摯に向き合う必要があると思っている。その人の過去を知り、生活の継続性を考えながら今を支え、そして未来をより豊かに生きることができるための支援を考え実践していくことが必要である。この考えは、私自身が母親の介護に直面した時、母親がどのような人生を歩み、どのような社会的な関係性の中で生活を営んできたのか、何が好きで、何を愛してきたのかなど。恥ずかしながらほとんど知らなかったことが背景にある。

介護福祉士は本人を支えるための知識・技術・価値観などを兼ね備えた専門職である。その介護実践がより豊かになるには、介護が必要な人自身から、その人の生き生きしてきた時代や暮らし方、生き様、介護する家族の思いなどを教えてもらうことと共に、家族介護者からも本人のことを聞くことが大切である。しかし、意外と家族介護者から本人のことや介護に対する家族の思いを聞くことが教育現場では難しく、学びの工夫が必要であると考えている。

〇おわりに

最後になりますが、介護福祉の進展には、介護実践と研究が必要であろう。日本介護福祉学会には、介護現場で活躍する人、教育現場や研究機関で活躍する人、家族介護を担ってきた人など多様な人がいる。日本介護福祉学会を通じて、それぞれの立場から介護の本質を考え、研究を継続することが介護福祉学の構築につながると考えている。

会費納入のお願い

本会は会員の皆様の会費により、運営しております。近年、会費未納により退会となる事例が問題となっております（会費を3年滞納された場合は、理事会の承認を経て退会処理となります）。

学会運営の健全化を導くうえでも、会員の皆様の会費の納入率の向上が必須です。どうぞ宜しくお願い致します。

正会員：9,000 円
学生会員：3,000 円

《会費振込口座》
◎郵便振替口座
00180-7-417389
加入者名：日本介護福祉学会
（他金融機関からのお振込みの場合）
〇一九（ゼロイチキュウ）店　当座　0417389
◎みずほ銀行 江戸川橋支店（545）普通預金
口座番号：1213646　口座名義：日本介護福祉学会
（ニホンカイゴフクシガッカイ）

本会の活動資金の大部分は、会員の皆様の会費によって成り立っています。学会の円滑な運営のため、ご理解ご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

▼お問い合わせ先▼
〒162-0801
東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター
日本介護福祉学会 事務センター
TEL：03-6824-9378，FAX：03-5227-8631
E-mail：jarcw-post@bunken.co.jp

編集後記

EPA介護福祉士候補生、技能実習生、特定技能と介護福祉現場では、多くの外国人介護人材が活躍しています。そして介護福祉士養成校の多くに留学生が存在し、出身国は20ケ国を超えています。

これまでは、介護福祉職の人材育成や、定着促進について研究をしてきましたが、これからは、異文化アジリティを有するリーダーをどのように育成するかなど、よりグローバルな視点の必要性を感じております。

本年は当学会30周年の節目にあたります。コロナ禍を経て、久方ぶりの現地開催（北星学園大学）となります第32回大会では、30年の歩みを振り返りつつ、次の10年を見据えた活発な議論が交わされることを期待しています。

皆さまもご体調に気をつけて、2024年度を過ごして参りましょう（の）。

第10期広報委員会
理　事　野田　由佳里
理　事　堀　崇樹
評議員　午頭 潤子
評議員　金山峰之